

イエスと弟子トマス

Jesus and Thomas the Apostle



第1回 「天の鳥が先に行く」

text: 宝彩有菜

◆はじめに◆ トマス福音書とは

「トマス福音書」は、1945年12月に、ナイル川の上流の約1000キロメートルにある「ナグ・ハナディ」という小さな村の農夫が近くの洞窟で偶然に見つけた大きなつぼの中に入っていたものです。その中には、羊の皮でカバーされた13冊のコプト語(古代末期のエジプト語)パピルス古写本があり、その第2冊目の中に、「トマス福音書」が収納されていました。

この114掲からなる「トマス福音書」が書かれたのは、推定紀元100年あたりということですから、約1850年間、砂の中に眠っていたこととなります。発掘された後、各国語に訳されて出版されています。日本語では、一旦英訳されたものから和訳したものや、原語から直接和訳したものなどがあります。今回、この「イエスと弟子トマス」で、使用する和訳は、主に「トマスによる福音書」(荒井献著・講談社学術文庫)によるものです。英訳は、(1)Thomas O. Lambdin と(2)Stephen Patterson and Marvin Meyerの2つの英訳を使いたいと思います。

このトマス福音書は、現在、正統と言われているキリスト教会の新約聖書の中の4つの福音書、すなわち、「マタイ福音書」「マルコ福音書」「ルカ福音書」「ヨハネ福音書」とは、別の福音書です。4つの福音書は、物語形式になっているので、「物語福音書」といわれていますが、この「トマス福音書」は、イエスの言葉だけを羅列してありますので、「言葉福音書」と呼ばれています。

トマス福音書の特徴・「言葉福音書」

「マタイ、マルコ、ルカ」は、共観福音書とも呼ばれ、同じような主題が、若干言い回しを変えて、それぞれに登場してきます。それらを並行個所といいますが、トマス福音書にも、共観福音書と並行する個所がたくさんあります。また、マタイ、マルコ、ルカには収納されていない独自の主題もたくさんあります。

トマス福音書は、「言葉福音書」ですから、物語になっていませんし、解説もありません。

そのほとんどは、「たとえ話」です。

普通、誰でも、何かを説明する場合に、まず、メインテーマ、つまり本題を説明し、そして、その解説を試み、さらに、分かりにくいようであれば、例え話を追加すると思います。たぶん、イエスも弟子達にそのようにして教えていたと思います。

例え話は、聞く側にとっては、印象も強烈ですし、面白いので、弟子達もよく覚えていたのでしょう。でも、本題や解説は難しいので、聞いた本人もそうでしょうが、口伝で、年代を経て伝わっていくと、しだいに忘れられてしまったようです。

それで、トマス福音書は、ほぼ「たとえ話」だけの羅列になって残っているのだと思います。また、共観福音書は、その「例え話」だけになったものに、後から、キリスト教会の神父等によって、解説が付け加えられたものだろうと思います。

ですから、共観福音書の「例え話」の部分は、確かにイエスの語った言葉だと思いますが、解説部分は、本当にイエスのいわんとした主題に即しているのかどうか、私は以前から疑問に思っていました。

そして、1945年に、有難いことに、トマスの福音書が発見されました。この発見によって私達は、イエスの言葉と思われる新発見の多くの例え話を手に入れることができました。もちろん、100年後に書かれたものですから、口伝者や筆記者が変えたり付け加えた言葉もあると思います。しかし、既存の「物語福音書」のように、「例え話を無理に解釈した部分」は付いていません。また、「キリスト教会に有利なように付

け足した解釈」をさも正当化するために、例え話の色合いを変えたようなところが「物語福音書」にはあるように見受けられますが、「トマス福音書」には、そうする必要もなかったと思います。ですから、割りとイエスの言明に近いのではないかと考えています。しかし、そうであっても、よく読んでみると、イエスをもっと違った言い方をしたのではないかと思う箇所もあちこちにありますので、それらは、本文の解説中に説明していきたいと思っています。

トマス福音書の特徴・「奇跡は無し」

キリスト教会の新約聖書では、「死んだ人が生き返る」「石がパンになる」「水上を歩く」などの、「奇跡事」がつぎつぎに記載されています。しかし、このような奇跡は、物理的、科学的な常識からしても、とても信じることではできません。有り得ないと思います。つまり、誰かが後から作った作り話だと私は思っています。ニーチェも、「神は一つの推測である」と「ツアラトウストラはかく語りき」の中で、そう言っています。西洋キリスト教の世界の中で、そう言いきることは、日本や、仏教世界のなかでそう意見表明するより、数倍も勇気が必要だったと思います。常識的に、科学的に、合理的に考えれば、「神」「天使」「悪魔」「幽霊」「お化け」などは、全部、ニーチェの言うとうり、人間が推測したり、想像したりした産物でしかありません。また、それらを信じさせるために、「奇跡が起こったのだ」という「証明」を無理やり付けようとしているのだと思います。つまり、なかなか普通では信じられない「神」をいかに信じさせるかの工夫が、それらの作られた「奇跡」の記述だと思っています。

ただし、「目が見えない人が見えるようになった」「歩けない人が歩けるようになった」というのは、ありうる話だと思います。これは「奇跡事」ではなくて、通常の医学的な事象だと思います。小さな心の悩みが取れただけで、肩凝りが治ったり、血圧が下がったりすることはよくあることです。大きな心配や心の不調が治ったら、目が見えるようになったり、腰がしゃんとして歩けるようになることも、ないことはありません。奇跡ではないと思います。

また、真っ暗闇のような心を持っていた人が、明るい天国のような心に、一気に変化することも、修行していると、通常あることだと思います。これも奇跡ではありませんが、本人は、地獄から、天国に行ったような、奇跡のように思うかもしれません。

そうすると、そのように、自分の目を開けてくれたり、足を直してくれたら、心を天国に導いてくれた人を、神様のように思っても、無理のないことかもしれません。

「私達の先生は、神様のような人だ」「私達の先生は、神様だ」と弟子達が吹聴して回っていたら、「それでは、本当に神様なのかどうか、見せて貰おうじゃないの、その奇跡とやらを見せて貰おうじゃないの」ということで、敵対する宗派(当時のユダヤ教)の手に落ちて、十字架に磔けになってしまったのかもしれない。よくわかりません。

トマス福音書の解説

トマス福音書に戻ります。トマス福音書は、イエスの生の言葉ばかりの言葉福音書です。そして内容は、ほとんどが、前述したとおり「たとえ話」ばかりです。今回、私は次の方針でこれを解説しようと思います。

その方針とは、残っているそれらの比喻、例え話から、「本題はなんであったか」、どんなテーマを説明する際にその例え話を使ったのか。つまり、メインテーマ、つまり「本題」を復元することです。しかし、復元

